

全国産業資源
循環連合会

資源循環の流れ、太く確実に

金沢で全国大会を開催



永井良一会長

（公社）全国産業資源循環連合会（永井良一会長）は11月16日、金沢市のホテル日航金沢で、「第17回産業廃棄物と環境を考える全国大会」を開催した。（公財）日本産業廃棄物処理振興センター、（公財）産業廃棄物処理事業振興

財団との共催で、全国から約670人が参加。「資源循環」を大きなテーマに掲げて講演やパネル討論会を行い、今後の業界の展望について議論を深めた。

出席。環境大臣表彰式典も行われた。冒頭、あいさつに立った永井会長は、「産業廃棄物処理業界では、これまでの適正処理に加えて、近年は資源循環の役割が強く求められ、いわば産業廃棄物の単なる受け手から、資源やエネルギーを製造する『創り手』へと変わる必要性が指

摘されている。連合会では、この資源循環に取り組む流れを太く確実なものとするため、業界振興のための新しい方策の検討を進めてきた。その成果として振興法案大綱を公表。今年4月には連合会の名称を変更した」と、業界情勢を反映した大会の趣旨を語った。A

パネル討論会のようす



I・IoTの活用と資源循環」と題し、早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授の小野田弘士氏が登壇。事故・ヒヤリハット事例収集システムやGI

S（地理情報システム）による廃棄物系バイオマス在荷量の「見える化」など、多様な事例を紹介し、「廃棄物・リサイクル分野特有の課題解決につなげ、次の戦略に生かすことができるか。今、非常に重要な局面を迎えている」と話した。

パネル討論会は、「資源循環の促進と排出事業者責任」をテーマに、BUN環境課題研修事務所主宰の長岡文明氏がコーディネーターを務めた。パネリストは、▽環境省環境再生・資源循環局廃棄物規制課長の成田浩司氏▽石川県生活環境部次長の蔵本和夫氏▽小松マテック・リエンジニアリング部環境エネルギー課長の森幸治氏▽クリンライフ社長の毎田正男氏（石川県産業廃棄物協会会長）。リサイクルの判断基準、災害廃棄物、優良産業廃棄業者認定制度など話題は多岐にわたたり、「適正処理あってこそ資源循環だ」と結論付けた。（関連記事6面）